特別活動のねらいを明確にした授業づくり

－小・中学校での福井県版ポジティブ教育プログラムの実践を通して－

教育相談センター　教育相談課

土井内佑輔

学習指導要領では、特別活動の特質や教育課程全体において特別活動が果たすべき役割などを踏まえ、特別活動全体を通して育成を目指す資質・能力を、「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」の三つの視点で整理している。また、家庭や地域との連携を工夫することや、児童・生徒相互の信頼関係を育み学級経営の充実を図ることが示されている。さらには、特別活動は学校教育全体を通して行うキャリア教育の要となることも示されている。本稿では、特別活動の目標を達成するための手立てとして、福井県版ポジティブ教育プログラムを活用した実践研究について取り上げる。

＊これまでの福井県版ポジティブ教育プログラムの実践については、「研究紀要第 127 号」に掲載

＜キーワード＞　特別活動　カリキュラム　キャリア教育　学級経営　ポジティブ教育
ソーシャルスキル教育　ピア・サポート活動　レジリエンス教育

Ⅰ　はじめに

特別活動は、学級活動、児童会活動・生徒会活動、クラブ活動及び学校行事から構成され、それぞれ構成の異なる集団での活動を通して、学校生活における課題の発見や解決を行い、よりよい集団や学校生活を目指した活動が行われている。その活動の範囲は、学年・学校段階が上がるにつれて広がりをもち、児童・生徒が学校生活を送る上での基盤となる力や社会で生きて働く力を育む活動として機能してきた。そこで育まれた資質・能力は、社会に出た後の様々な集団や人間関係の中で生かされている。

特別活動では、協働性や異質なものを認め合う土壌を育むなど、生活集団、学習集団として機能するための基盤となるとともに、集団への所属感、連帯感を育む。それらが学級文化、学校文化の醸成へとつながることから、各学校が特色ある教育活動を展開してきた。一方で、各活動・学校行事において身に付けるべき資質・能力は何なのか、どのような学習過程を経ることにより資質・能力の向上につなげるのかということが必ずしも意識されないまま指導が行われてきたという実態も見られる。また、内容や指導のプロセスの構造的な整理が必ずしもなされておらず、各活動等の関係性や意義、役割の整理が十分でないまま実践が行われてきたという実態も見られる。

このような特別活動の特質を踏まえ、今回の学習指導要領改訂においては、これまでの目標を整理し、指導する上で重要な視点を「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」の三つとして整理した。そして、学習の過程を、「様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決することを通して」資質・能力の育成を目指すと示した。また、特別活動の特質に応じた見方・考え方として、「集団や社会の形成者としての見方・考え方」を働かせることと示した。

本稿では、同一中学校区の小学校１校、中学校１校を研究協力校とし、特別活動のねらいである、よりよい人間関係の形成や自己の実現につながる手立てとして、福井県版ポジティブ教育プログラムを活用した授業の有効性を示したい。

Ⅱ　研究の概要

1　研究協力校について

越前市北日野小学校（以下、北日野小学校）は、第５学年のみ２学級構成で、それ以外は単学級構成の小学校である。令和２年度より福井県版ポジティブ教育プログラムの実践に取り組んでいる。

越前市万葉中学校（以下、万葉中学校）は、各学年４学級構成、特別支援学級２学級の中学校である。万葉中学校区に北日野小学校がある。

2　小学校での実践

北日野小学校での研究１年目の昨年度は、三つの学級において、学級活動の時間に福井県版ポジティブ教育プログラムを実践した。研究２年目となる今年度は、実践を学校全体に広げ、学級活動での実践に加えて、特別活動主任（以下、特活主任）との協働で児童会活動での実践や校内研修会を行った。

(1) 学級活動における実践

研究１年目（令和３年度）は、１学年、４学年、６学年より各１学級において、学級活動の時間に福井県版ポジティブ教育プログラムの実践を行った。学級担任（以下、担任）は学級の実態に応じてプログラムを選択し、所員が特別活動のねらいに基づいて指導案を作成し提案した。実践では、担任と所員がティームティーチング（以下、TT）で授業を行い、交代で T1 を務めた。新型コロナウイルス感染拡大による緊急事態宣言中は、担任のみで授業を行った。授業実践は年間を通してソーシャルスキル教育を４時間と、６学年ではレジリエンス教育を２時間加えて行った。実際に行った内容は以下のとおりである。

１年１組	
活動	資質・能力を育むための視点
SST 上手な聴き方	人間関係形成
SST 互いに認め合う仲間づくり	
SST よいところ探し	
SST 相手の気持ちを考えよう	

＊SST はソーシャルスキルトレーニング

４年２組	
活動	資質・能力を育むための視点
SST 上手な聴き方	人間関係形成
SST 気持ちのよい話し方	
SST よいところ探し	
SST 相手の気持ちを考えよう	

６年１組	
活動	資質・能力を育むための視点
SST 互いに認め合う仲間づくり	人間関係形成
SST 上手な聴き方	
SST 気持ちのよい話し方	
SST 気持ちを周りの人に伝えよう	
RES 自分を支えてくれるもの	自己実現
RES 自分を支えてくれる人	

＊RES はレジリエンス教育

研究２年目（令和４年度）は、全学級で福井県版ポジティブ教育プログラムを実践した。所員は、２学年と５学年の２学級において、年間を通して学級活動での実践に関わった。それ以外の学級においても、プログラムの選択や指導案の提案等を行った。また、必要に応じて T1 として実践に関わった。実際に行った内容は以下のとおりである。

２年１組	
活動	資質・能力を育むための視点
SST あたたかい言葉がけ	人間関係形成
RES 失敗は成長のチャンス	自己実現
RES「NO!」と言える勇気	

５年１組	
活動	資質・能力を育むための視点
RES 自分の「強み」に気づく	自己実現
SST 相手の気持ちを考えよう	人間関係形成
SST 力を合わせて	社会参画
PS うわさ話への対処法	人間関係形成 社会参画

＊PS はピア・サポート活動

① ソーシャルスキル教育「じょうずな聴き方」

１学年で実践した「じょうずな聴き方」は、人間関係形成の視点から、よりよい関係づくりのための知識・技能を身に付けることをめあてとした。児童は、教師の「上から目線の聴き方」「スルーする聴き方」「心地よい聴き方」の３つのモデルを見て（図１）、違いを理解した後、ペアで聴き方のトレーニングを行った。「最後まで聴く、相手を見て聴く、うなずきながら聴く」ことが聴き方名人のコツだということを知り、実際にそれらのスキルを使って、ペアでやり取りを行った。活動では、これらのスキルを使いながら一生懸命に聞こうとする児童の姿が見られた。児童からは、「最後まで聞くのが難しかった」「友達に最後まで聞いてもらってうれしい気持ちになった」という感想が出た。授業の終わりに教師の話を聞く場面では、聴き方名人のコツを使って話を聞く児童が多く見られた。

図１　心地よい聴き方のモデル

② レジリエンス教育「自分を支えてくれるもの・自分を支えてくれる人」

６学年で「自分を支えてくれるもの」と「自分を支えてくれる人」の実践を続けて行った。めあては、自己実現の視点から、自分を支えてくれる人に対して、何を伝えていくとよいか、よりよい自分づくりには、自分のよさや可能性をどのように生かしていくとよいか思考・判断・表現することである。卒業を間近に控えた６年生が、今の自分を支えているものと人について紹介し合った（図２）。児童は、「時間を忘れるくらい夢中になれるから」「おばあちゃんに買ってもらったから」などの理由を伝えながら、互いに興味をもって話を聞いていた。「みんなが色々なものを大事にしていることに気付いた」「自分の話をしっかり聞いてくれてうれしかった」という感想が出た。児童は、今の自分が様々なものや人に支えられて成長してきたことを再確認し、自分もこれから出会う人を支えることができる可能性をもっていることに気付いていた（図３）。

図２　自分を支えてくれるものの紹介

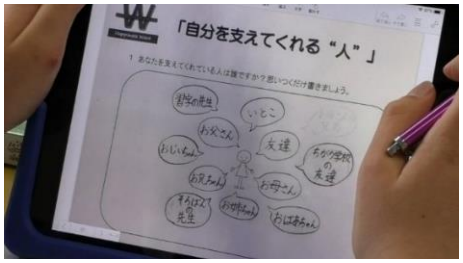


図３　自分を支えてくれる人のワークシート

③　ピア・サポート活動「うわさ話への対処法」

５学年で、人間関係形成の視点から、うわさ話にはゆがんだ情報が含まれている可能性があるという知識・技能を身に付けること、トラブルに巻き込まれないよう、人間関係を実践的によりよいものにしていこうという態度の育成をねらいとした、「うわさ話への対処法」の実践を行った。伝言ゲームを用いて、情報が正しく伝わらないことを体験した。思い込みとコミュニケーション不足によって、情報がゆがんで伝わることが原因であることを確認した。具体的な場面を用いて、トラブルに巻き込まれないためには、友だちにどのように話したらよいかを考え、グループで話し合った。友達から、ある人に自分の悪口を言いふらされているという相談に応える場面では（図４）、「自分はそのような話を聞いたことがないけれど、誰が言い始めたことなのか」「それは自分の思い込みではないか」などのアドバイスをしていた（図５）。児童の感想は、「情報を上手く伝えることは、なかなか難しいことだと思った」「すべてうのみにせず、正しい情報か、一度話してみてから判断する」「正しい情報か考えて、うわさに惑わされないよう気をつけたい」というものがあった。

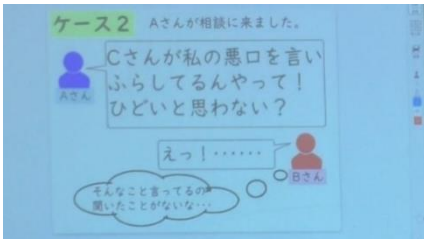


図４　相談をされる場面

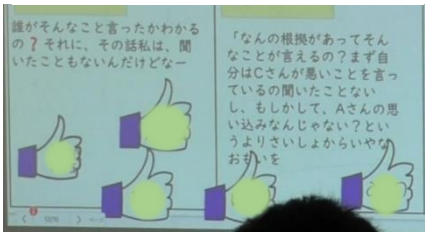


図５　対応策の話し合い

⑵ 児童会活動における実践

児童会活動は、集団の一員としてよりよい学校づくりに参画していく活動であり、異年齢集団による交流を通して、人間関係形成、社会参画、自己実現の三つの視点から効果が期待できる教育活動である。今年度は、特活主任と協働して、北日野クリーン作戦において、ソーシャルスキル教育で身に付けたスキルを生かして、ピア・サポート活動に取り組んだ。北日野クリーン作戦は、縦割り班の校地周辺の清掃活動であり、全校児童が参加し、運営は児童会役員と４年生以上の生活委員が担当している。運営に携わる児童が、委員会の時間に、具体的にどのような目的で北日野クリーン作戦に臨みたいか、そのためには仲間のためにどのような行動をするとよいかを考えて、ピア・サポートの計画を立てた。当日は、校長より、「地域の方々から、みなさんは地域の宝だと言われている。これから大人になって、この北日野地区を担っていくことになる。地域を掃除することはとてもよい活動である。」と活動の意義が伝えられた。運営に携わる６年生児童は、「日頃から地域にお世話になっているけれど、なかなか掃除をすることはできていないので、全校で協力して取り組み、地区をきれいにして、自慢できる北日野地区にしましょう。」と活動の目的を伝えていた。６年生からは、「自分の班だけでなく、すべての班が地域をきれいにできるようになってほしいので、どの班にも気配りして活動したい。」との声があった。活動中は、単なる清掃ではなく、ピア・サポートの活動でもあることを意識して取り組んでいる姿が見られた。仲間と協力して集めた落ち葉を袋に入れる姿や、高学年の児童が防球ネットを持ち上げて、その下を低学年の児童が掃除する姿や、早く終わった児童に声をかけて、一緒に別の場所に移動していく姿も見られた。活動後の６年生からは、「この活動でやったことが大人になっても役に立つ力になると思う。」との声が聞かれた（図６、７）。

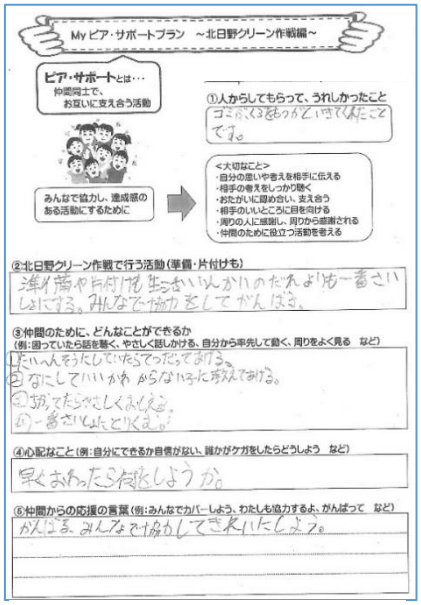


図６　児童のワークシート

図７　北日野クリーン作戦

⑶ 特活主任との協働

研究１年目は、各活動が単発で終わっていた。その課題を解決するためには、校内に特別活動において福井県版ポジティブ教育プログラムの推進役となる教員が必要だと感じた。研究２年目では見通しをもち、連続性のある実践ができるよう、校長、教務主任と協議し、特活主任と協働して実践研究を進めることとした。

特活主任との協働では、研修、計画づくり、公開授業、学級活動以外の実践の４点に取り組んだ。５月と８月に全教職員を対象に校内研修会を行った。５月の研修会では、所員が福井県版ポジティブ教育プログラムの概要を説明した。８月の研修会では、特活主任を中心に、全教員で１学期の学級活動を振り返り、福井県版ポジティブ教育プログラムの実践がどの程度できたかを確認した。充分な実践に結び付いていない現状について、その原因を話し合った。教員からは、「年度初めの年間計画に組み込まれていないから」「準備の時間が取れなかった」「何をしていいかわからなかった」といった意見が出された。研修会では、学級の実態に応じて、２学期以降に取り組みたい活動を決める時間を設け、全担任が２学期の月ごとの計画を立てた。また、所員が福井県版ポジティブ教育プログラムの体験型研修を行い、教員は実際に活動内容を体験することで、授業づくりの見通しをもつことができた。６月の指導主事訪問での授業と、11 月の県外からの参観者に向けた公開授業では、協働して授業づくりを行った。また、11 月の学校公開日には、２つの学年で福井県版ポジティブ教育プログラムの公開授業を設定した。参観した保護者に対してはアンケート調査を行い、結果を学校と共有した。12 月には、２学期の学級活動を振り返り、次年度に向けた特別活動の年間計画を見直した。

３　中学校での実践

万葉中学校での研究１年目の令和３年度は、１学年の全４学級において、学級活動で福井県版ポジティブ教育プログラムの実践を行った。研究２年目の今年度は、引き続き同じ生徒を対象として、２学年の全４学級で学級活動に加えて、学校行事での実践を行った。

⑴ 学級活動における実践

研究１年目（令和３年度）は、１学年４学級において学級活動で福井県版ポジティブ教育プログラムにおけるピア・サポートトレーニング（ピア・サポート活動に使うスキルトレーニング）の実践を２回行った。実践では、担任と所員が TT で授業を行い、所員が T1 を務めた。他の担任は授業を参観した後に、授業者として自身の学級で授業を実践した。

①　ピア・サポートトレーニング「みんなってすごい！自分もすごい！」

６月に「みんなってすごい！自分もすごい！」の実践を行った。めあては、人間関係形成の視点から、よりよい関係づくりのための知識・技能と、ともに成長していくクラスを作るために、異なる意見を尊重して話し合う主体的態度を身に付けることである。人間関係形成には自己開示とフィードバックが大切であることを説明し（図８）、班で話し合い活動を行った。活動では、同じものを見ても捉え方が違うことを体験し、自分の意見と他人の意見の違いに驚いている生徒が多く見られた。授業は中学校に入学して間もない６月に行ったが、積極的に自己開示している生徒の様子や、相手を否定することなく納得しながらやり取りをしている様子が見られた（図９）。生徒からは、「上手にコミュニケーションをとるコツを学んだ」「他の人の意見も理解してたくさんの人と付き合っていきたい」という感想が出た。

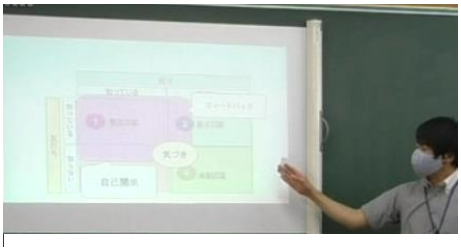


図８　自己開示の説明

図９　生徒のやり取り

② ピア・サポートトレーニング「わたしのハート」

１月に「わたしのハート」の実践を行った。めあては、人間関係形成の視点から、よりよい関係づくりのための知識・技能と、自分の気持ちを伝えたり、相手に質問したりして、自己理解や他者理解を深めようとする主体的態度を身に付けることである。空白のハートに色を塗ることを通して自分の気持ちを表現することを体験し、班で話し合い活動を行った（図 10）。自分を見つめなおして自己理解を深めている生徒が多く見られた。「自分を表現することが上手な人と苦手な人がいることに気付いた」「人はそれぞれに抱えている悩みがあり、自分がどうやってサポートできるかを考えたい」という感想が出た。

図 10　自分の気持ちの表現

(2) キャリア教育における実践

中学校２年生はキャリア教育の一環として職場体験を行っている。その事前学習として、働くために必要なことを考える時間や、自分がなりたい職業について考えたり調べたりする時間がある。そこで、福井県版ポジティブ教育プログラムのレジリエンス教育にある「自分の強み」を職業選択に生かすという活動を提案した。また、夢の教室と関連させて、レジリエンス教育の「立ち直るために必要な力」の活動を行った。

① レジリエンス教育「わたしの強み」

６月に「わたしの強み」の実践を行った。めあては、自己実現の視点から、これからの生活のどのような場面で、自分のどの強みを生かして生活していくかを思考・判断・表現することである。ポジティブ教育の 24 の強みの中から、班のメンバーに自分のよいところや自分の強みを選んでもらい、なぜその強みを選んだのかを伝えてもらった。次に自分の強みだと思うものを１つ選んで、班のメンバーになぜその強みを選んだのかを伝えた（図 11）。自分の強みを理解した後、自分が欲しい強みを考えた。後半は、いろいろな職業を取り上げ、その職業にはどのような強みがあるとよいかを考えた。働くには適性を知るとよいということや、自分の強みを職業選択につなげることができることを共通理解した。また、強みは使えば使うほど磨かれていくこと、自分に足りない強みも今後獲得する可能性があることを確認した。

図 11　相手の強みを伝え合う様子

② 夢の教室（公益財団法人日本サッカー協会 JFA こころのプロジェクト）

２年生を対象に毎年行っている「夢の教室」では、プロスポーツ選手を夢先生として迎え、その選手が夢を達成するまでの経緯を、夢曲線（図 12）を使いながら紹介する。11 月の夢の教室では、元プロビーチバレーボール選手と、元プロサッカー選手が夢先生として登壇した。夢先生からは、「自分の得意なことを生かすこと」「夢中になれるものと出会うこと」「あきらめずに、現状を変えることを考えること」「自分の弱みも知ったうえで、人それぞれの良さや苦手さを合わせることで乗り越えていけること」などを教えてもらった。生徒からは、「夢に向かって今できることをやっていく」「箱根駅伝に出たいので、出場できる大学へ進学できるように頑張りたい」といった声が聞かれた。困難や逆境を乗り越えて夢を達成する過程は、中学生が自己実現に向けて参考となる内容であり、生徒は自分の過去や今の状況を客観的に見ることができていた。

図 12　夢曲線

③　レジリエンス教育「立ち直るために必要な力」

夢の教室で、プロスポーツ選手が挫折を乗り越えて夢に向かって努力し成長していった話を聞いた後に、「立ち直るために必要な力」の実践を行った。レジリエンス曲線を使って、落ち込んだ時はそれを早く止めることと、そこから立ち直りの力を使っていくことで回復していくことができることを伝えた（図 13）。今の自分にはどのような立ち直りの力があるかを考えた後、今後自分に必要な立ち直りの力を個人で考え、班で話し合った（図 14）。最後に、立ち直りの力をこれからの生活にどのように生かしていくか、行動の目標を立てた。生徒からは、「人とつながることが大切だと気付いた」「目標に向けて、まず一歩踏み出したい」「誰かの役に立つような行動をしたい」といった声が聞かれた。

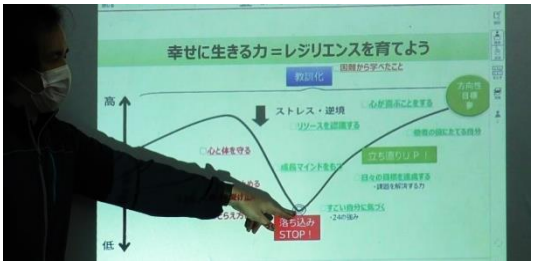


図 13　レジリエンス曲線の説明

図 14　立ち直りの力を伝え合う様子

(3) 学校行事における実践

中学校の学級活動は、学校行事との関連性が高い。そこで、研究２年目の今年度は、学校行事と関連させる実践を提案した。校外学習と学校祭で、福井県版ポジティブ教育プログラムの「よいところさがし」の活動を行った。

学校祭は計画や準備も含めて長期間活動する学校行事である。生徒が主体となって運営するため、生徒自身が自ら考えて行動することで、成長が期待される。共通の体験やリーダー・フォロワー体験の機会が多く、相互理解や人間関係形成にもつながっている。この期間を使って「よいところさがし」の実践を行った。「ステージ企画で大勢の前で話していてすごいと思った」「店番の時間が過ぎても、混んでる間ずっと残って手伝っていた」「大縄跳びで一番先頭をしっかり務めてくれた」といったカードを渡していた。カードは教室に掲示した（図 15）。

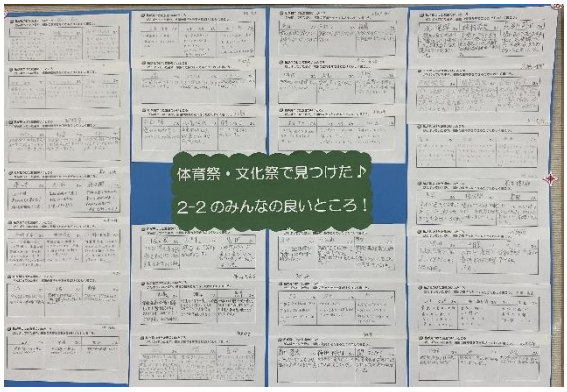


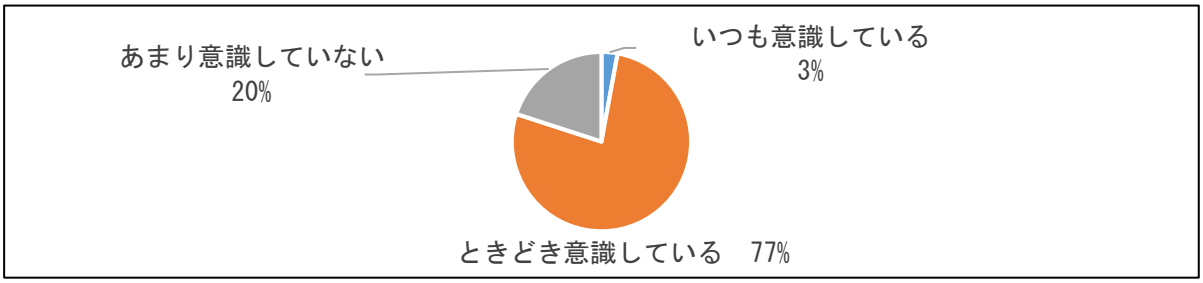
図 15　よいところ探しの掲示

4　結果および考察

(1) 小学校児童対象アンケート（令和５年１月実施）回答数 35

福井県版ポジティブ教育プログラムの実践に取り組んだ児童対象にアンケート調査を行った。

①　ポジティブ教育で学習したことを、普段の生活で意識しているか



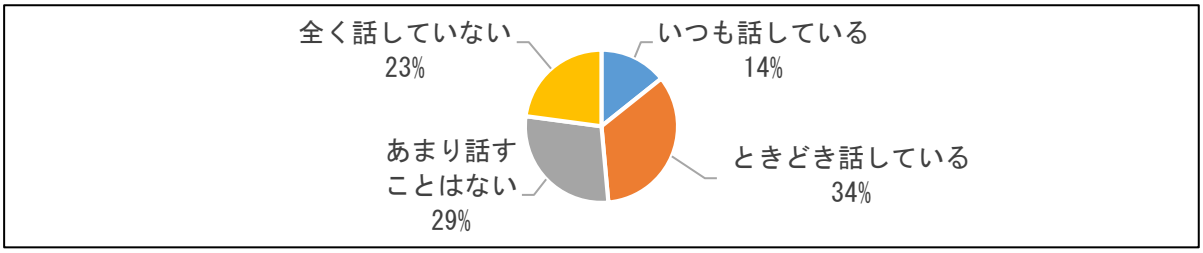
② どのようなことを意識しているか

- 相手の気持ちを考えて、聴き方や言い方に気を付ける
- うわさ話をすぐ信じない（うわさ話に流されない、うわさ話をしない）
- 困ったときに友達に助けを求める（相談する）

③ ポジティブ教育の授業を受けて、自分が変わったと思うことや成長したと思うこと

- 周りの人を大切にするようにして、友達との関係が良くなり、自分の意見が言いやすくなった
- 自分自身のことをよく知ることができ、自分も誰かの力になりたいと思うようになった
- クラスの一員だという思いが強くなり、クラスをもっと良くしていこうと思うようになった
- くじけたときに頑張れるようになった
- 将来に向けての目標が見つかった

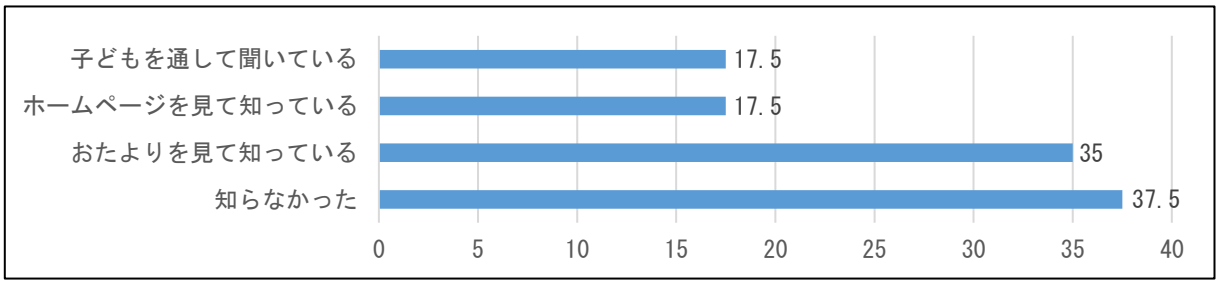
④ ポジティブ教育で学習したことを、家族と話しているか



(2) 小学校保護者対象アンケート（令和４年 11 月実施）回答数 40

福井県版ポジティブ教育プログラムの公開授業を参観した保護者対象にアンケート調査を行った。

① ポジティブ教育について知っていたか（複数選択可）



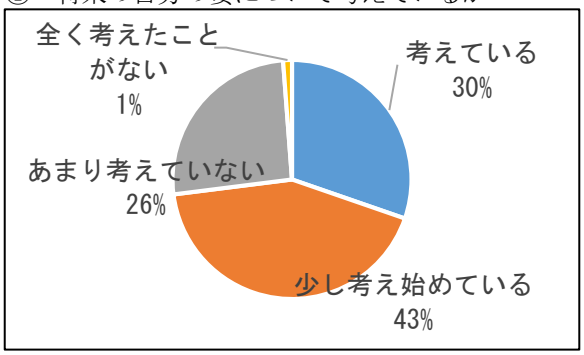
② ポジティブ教育の授業参観の感想

- 相手の感じ方を学ぶと、お互いを尊重する態度が育つ良い授業だと感じた
- 自己肯定感を高めるため、相手を傷つけないためにも今後も続けて欲しいと思う
- 普段、自分がどのように聞いているか振り返る時間があると良かった
- このような言葉を使うと良いと説明してもらった後に実践していて、理解しやすそうだった
- 学校全体で取り組んでいて、一人一人が尊重される環境ができていることに感心した

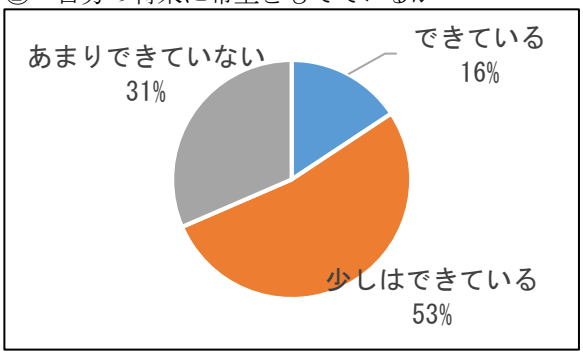
(3) 中学校生徒対象アンケート（令和５年１月実施）回答数 89

福井県版ポジティブ教育プログラムの実践に取り組んだ生徒対象にアンケート調査を行った。

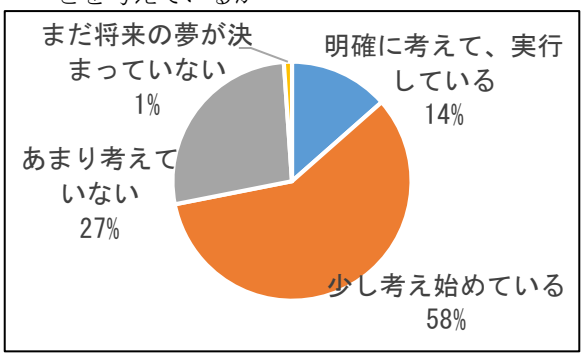
① 将来の自分の姿について考えているか



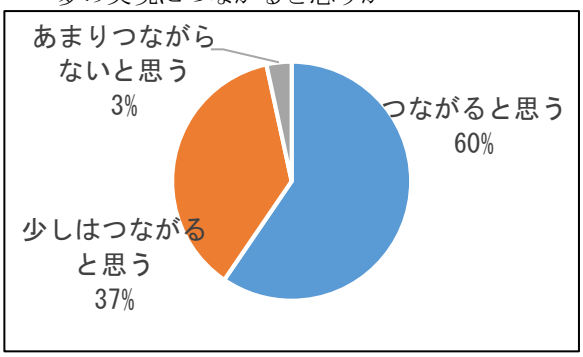
② 自分の将来に希望をもてているか



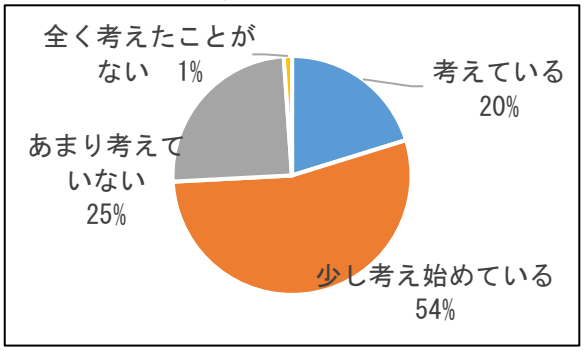
③　将来の夢の実現に向けて、今の自分にできることを考えているか



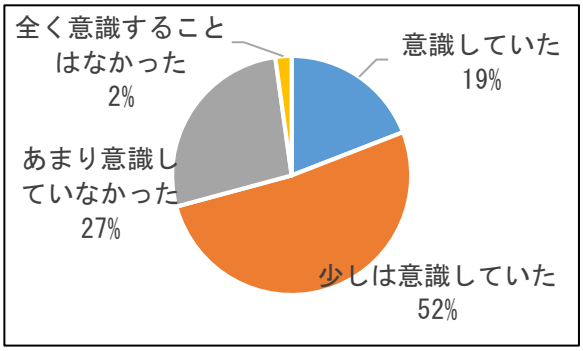
④　自分の強みを意識して生活することは、将来の夢の実現につながると思うか



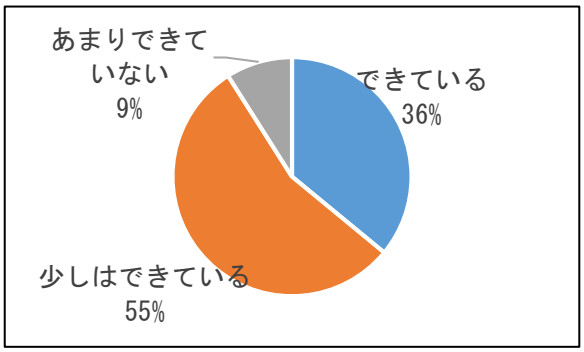
⑤　自分の強みを、集団の中でどのように生かしていくとよいか考えているか



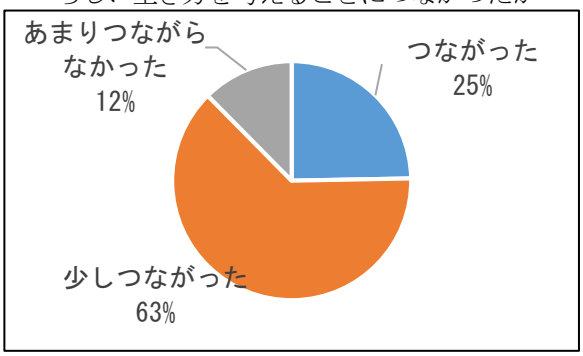
⑥　自分に必要な「立ち直りの力」を意識して生活してきたか



⑦　自分らしい生き方ができていると思うか



⑧　立ち直るために必要な力を考える授業は、自分らしい生き方を考えることにつながったか



(4) 教員対象アンケート（令和４年１月実施）回答数４

１年目の実践研究を終えて、実践に取り組んだ教員対象にアンケート調査を行った。

①　ポジティブ教育をやってみて、教師にとってよかったと感じること

- 教師自身が人と関わるときに何気なく気を付けていることを、改めて意識することができた
- 授業後、いろいろな場面において、学習したことを話題にすることができた
- 子どもたち同士のトラブルが起きたとき、学習したことを取り上げて指導がしやすくなった

②　ポジティブ教育をやってみて、児童・生徒にとってよかったと感じること

- 友達との関わりの中で、上手に言葉で伝えることができなかったり、誤解される行動をとってしまう子にとって、有意義な時間になったと思う
- 場面ごとに指導されたことをイメージしやすく、指導内容がすんなり児童に伝わったと思う
- 児童自身から「やってみよう」とする雰囲気を感じた

③　ポジティブ教育は、学級活動の時間を充実させるのに有効な手立てだと思うか

Aそう思う（100%）Bややそう思う（0%）Cあまり思わない（0%）　D思わない（0%）

- クラスが良い雰囲気になるから
- 集団づくりの手立ての一つとして取り入れられる
- 授業などで、学習した内容を児童・生徒が実行しようとする場面が見られたから

(5) 教員対象アンケート（令和４年 12 月実施）回答数 12

２年目の実践研究を終えて、実践に取り組んだ教員対象にアンケート調査を行った。

①　ポジティブ教育を通して、児童・生徒にどんな力が育つと思うか

- 自己を肯定し、他人を大切にすること
- よりよい人間関係を築く力
- 集団をよくしていこうとする力や社会性
- 辛いことがあったときに立ち直る力

②　ポジティブ教育の授業を実践して、児童・生徒の変化が見られたと感じること

- 人間関係のトラブルが減った
- 互いの意見の違いを認め合い、学級や委員会で話し合う時間や回数が増えた
- 自分のよさを発揮したり、自分の成長に気付いていたりして、自己肯定感が高まった
- 授業を通して自分自身にしっかり向き合うことができていた

③　ポジティブ教育は、学級活動の時間を充実させるのに有効な手立てだと思うか

Aそう思う（37.5%）Bややそう思う（62.5%）Cあまり思わない（0%）　D思わない（0%）

- 学級活動で取り上げる議題は、これまで学級の問題点などに偏っていたから。
- 子ども達が活発に話し合い、課題を解決したり、友達の意見を聞いて考えていたりしていたから
- 人間関係の構築に関係するから
- 生徒が自分自身の内面により迫れる内容だから
- 学級活動を通してより良い集団にしていくために、ポジティブ教育をして生徒たちの自己肯定感ややる気を高めることはとても重要だと思うから

(6) 考察

児童・生徒・保護者・教員を対象としたアンケート調査の結果および実践研究における所員の所見から、次の３点の考察を行った。

①　学級経営の充実

研究協力校における実践では、所員が訪問するたび、とても温かい学級の雰囲気を感じた。教員は、学級活動を通して、児童・生徒がお互いを意識し合える、より良い集団づくりを意識していた。多様な考え方を認め、友達の意見をしっかり聞いて考えるなど、話合いがより活発になった。児童・生徒は、学級への所属欲求が高まり、よりよい学級にしていこうという意欲が高まってきている。児童・生徒が身に付けた資質・能力は、集団においての関係づくりに有効であり、特別活動のねらいである、人間関係形成や社会参画の視点から、学級経営の充実につながっていると考える。

一方で、自分の強みを、集団の中でどのように生かしていくとよいか考えていない生徒が一定数いることが挙げられる。集団での関わりを通して自己の理解を深めるだけにとどまらず、自己のよさや可能性を生かして学級の問題等に主体的に関わり解決しようとする態度を育てる必要があると考える。

②　キャリア教育の充実

小学校での実践を通して、児童は、自分がいろいろなものや人によって支えられていることを実感し、自分にもこれから出会う人を支えることができるという視点をもった。中学校では、様々な職業に必要な強みを考えたり、自分が高めたい強みを考えたりして、自分の強みを職業と結びつけるという視点をもった。中学２年生のおよそ７割は、将来の自分の姿をイメージし、将来の夢の実現に向けて今の自分にできることを考えている。80%の生徒が、「夢の教室が自分の将来を考えることにつながった」と回答していることや、「自分の強みを意識して生活することが将来の夢の実現につながる」と回答している生徒が 98%いる。このことから、生徒は自分をよりよく知り、なりたい自分に向かって今できることを考えることが

できたことがうかがえる。

一方で、約３割の生徒が、自分の将来に希望をもてていないことがわかった。自分の強みを集団の中や普段の生活において生かしていくことや、定期的にそれができているかを振り返ることは重要だと考える。特別活動でキャリア教育をいっそう充実させていくことは、児童・生徒が自分の将来を考え、現在及び将来の自己の課題を発見し改善して、よりよい生き方を追求していこうとする態度を育てるために重要であると考える。

③　特別活動を充実させる手立てとしての福井県版ポジティブ教育プログラムの有効性について

実践後のアンケート結果から、児童・生徒が人間関係を実践的によりよいものへと形成できるようになったことや、よりよい学級や生活をめざして、問題を解決しようとしていたことがわかった。また、子ども同士が関わり合いながら意欲的に活動する様子や、互いの意見の違いを認め合いながら活発に話し合い、課題を解決している様子から、児童・生徒が、集団の中で、人間関係形成や社会参画に必要な資質・能力を育成していたことがわかった。さらには、90%を超える生徒が「自分らしい生き方ができている」と実践後に回答し、87%の生徒が、「立ち直るために自分に必要な力」を考える授業は、自分らしい生き方を考えることにつながったと回答している。ことから、他者との関わりの中で自己理解を深めて、自分の生き方を考えたり、自己のよさや可能性を生かしたりしながら、将来なりたい自分に向けて、今の自分にできることを考え、実践しながら、よりよい自分づくりを目指すことができるようになったことがわかった。これらのことから、福井県版ポジティブ教育プログラムが、特別活動のねらいを反映した充実した活動につながったと考える。

Ⅲ　おわりに

当センターによるこれまでの研究で、ポジティブ教育は、児童・生徒の自己肯定感を高めることや集団づくりに有効であることが示唆されている。本研究では、ポジティブ教育を教育課程のどの時間でやっていくかというポジティブ教育側ではなく、特別活動側からポジティブ教育を捉え直すという視点で進めた。

本研究では、特別活動の三つの視点で福井県版ポジティブ教育プログラムの実践研究を行い、互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決し、集団としての合意形成や一人一人の意思決定を行う学習の過程や、集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせる具体的な手立てを示し、特別活動のもつ重要な役割である学級経営の充実やキャリア教育の充実に有効であることが示唆された。

特別活動の質をさらに高めるには、教科等横断の視点でのカリキュラム・マネジメントや、特別活動と教科、道徳、総合的な学習の時間との往還が必要となってくる。特別活動とそれらを関連させた、学校の教育活動全体での取組みにしていく必要があると感じている。

異年齢集団において互いの発達段階を理解した上で認め合おうとする見方･考え方は、将来の職場や地域で生じた問題を、同僚や地域の人々と話し合って解決することにつながっていく。また、児童会活動や学校行事で育てた見方･考え方が、地域や社会の活動に参画したり、地域行事等に進んで参加したりする見方･考え方につながっていくということを意識して、特別活動を実践していくことが重要であると感じている。

最後に、本実践研究のためにご協力いただいた小・中学校の教職員の皆様にこの場を借りて心より厚くお礼申し上げます。

参考文献

(1) 文部科学省（2018）『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　総則編』
(2) 文部科学省（2018）『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　特別活動編』
(3) 文部科学省（2019）『みんなで、よりよい学級・学校生活をつくる特別活動　小学校編』
(4) 文部科学省（2016）『学級・学校文化を創る特別活動　中学校編』